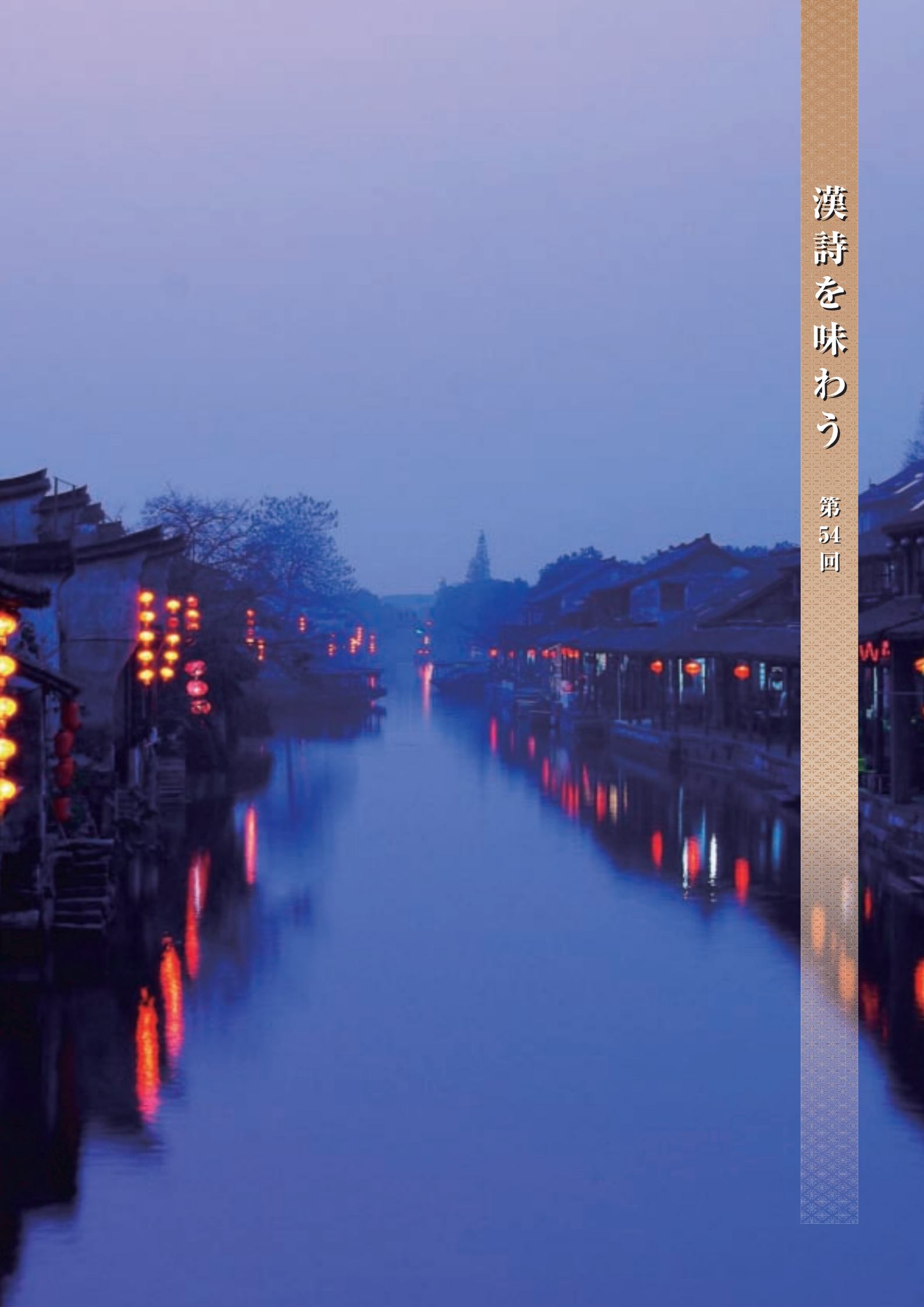




漢詩を味わう

第54回



泊秦淮 杜牧

煙籠寒水月籠沙

煙は寒水を籠め 月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家

夜秦淮に泊して 酒家に近し

商女不知亡國恨

商女は知らず 亡國の恨み

隔江猶唱後庭花

江を隔てて猶お唱う 後庭花

夕もやが寒々とした川面にたちこめ、月の光が岸の砂をつつみこむ。

こよい秦淮の流れに舟を泊めれば、酒樓は近い。

妓女たちは陳の亡國の恨みも知らぬまま

川を隔てた対岸で「後庭花」を歌う。

《秦 淮》 健康（今の南京）の城内を貫流し揚子江に注ぐ川。兩岸にはかつて

酒樓が立ち並び遊興の地であったという。

《寒 水》 寒々とした川。ここでは秦淮をさす。

《商 女》 歌妓。または遊女。

《後庭花》 歌曲の名で正しくは「玉樹後庭花」。

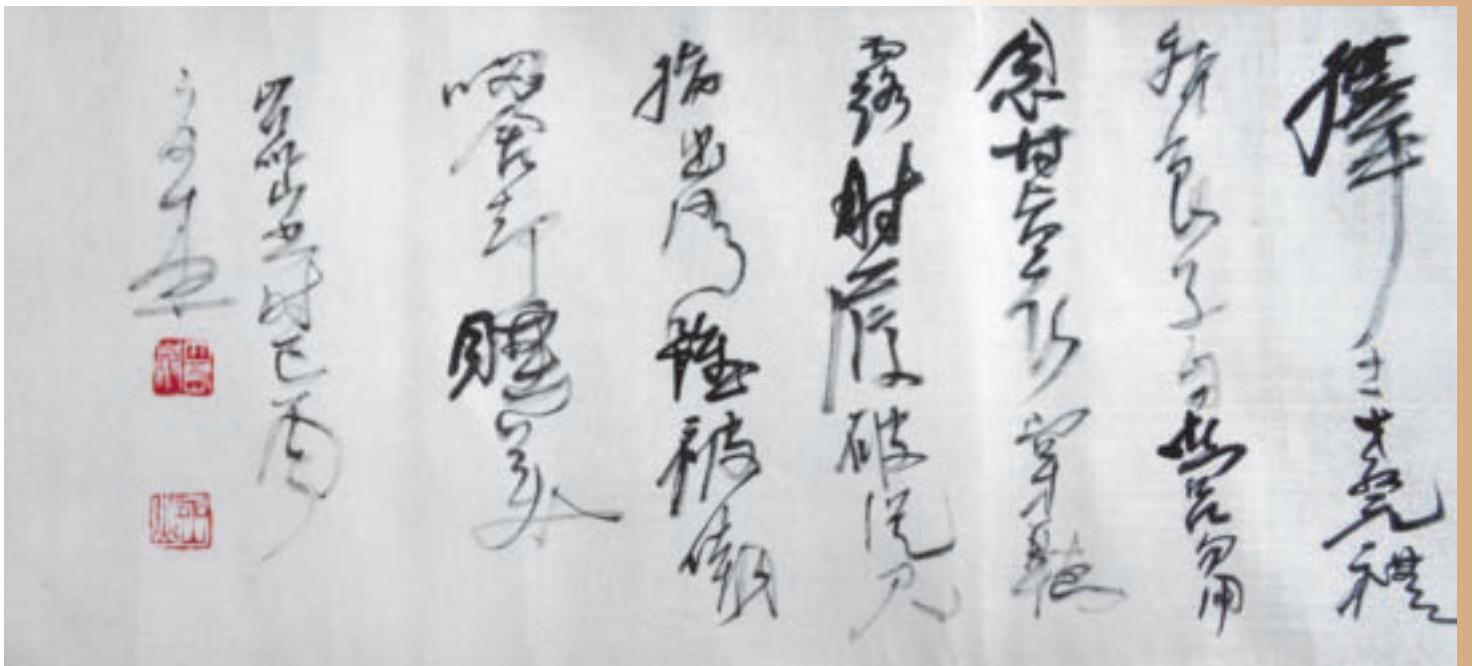
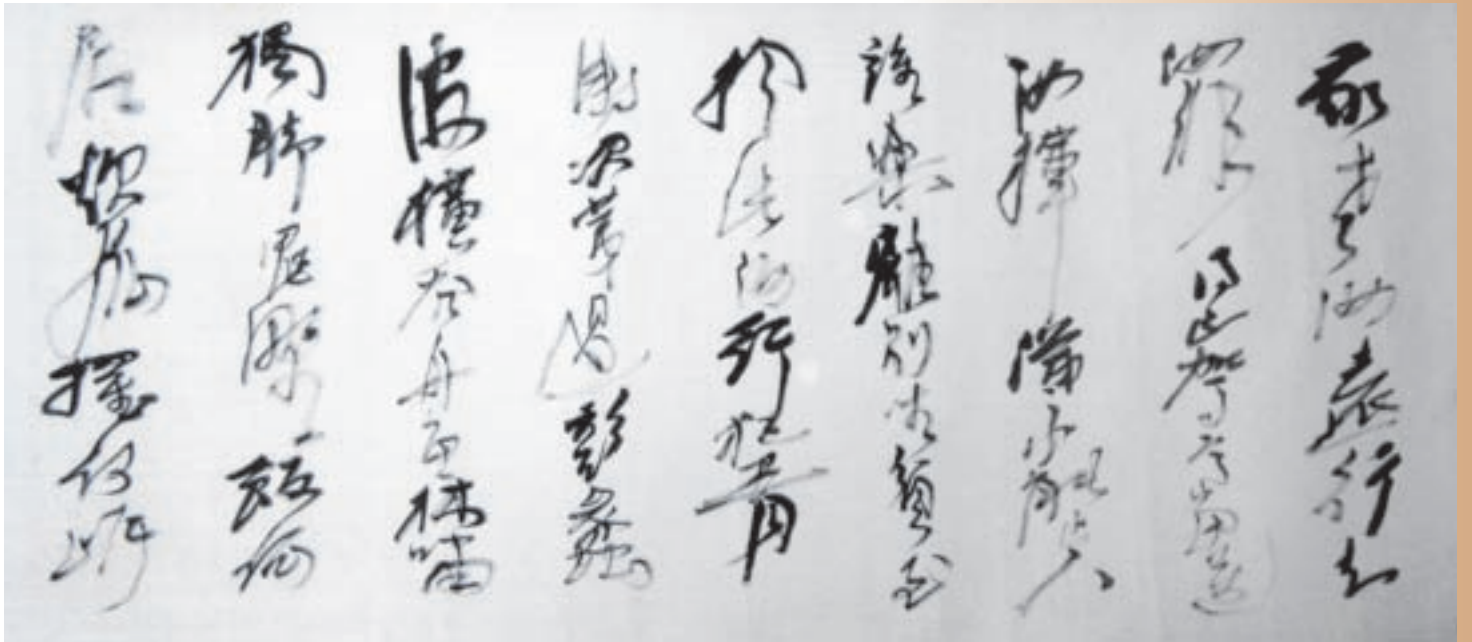
六朝最後の天子である陳の後主、叔宝は酒色に溺れて国事をかえりみず、自ら詩を作っては妃嬪や宮廷詩人たちと宴楽に耽っていました。そして隋の軍隊が宮廷に攻め入ると寵妃とともに井戸に飛び込むも、捕えられて隨の都長安に十六年間幽閉されてしまいます。六朝（二二二～五八九年。三国時代の呉・東晋、南朝の宋・齊・梁・陳の六つの国の総称）の栄華は彼をもって終止符を打ちます。ちなみに後主とは短く終わった王朝の最後の天子を称する語で、以前に紹介した「虞美人」や「浪淘沙令」などの詩で知られる李煜も、のちに南唐李後主と呼ばれた風流天子でした。

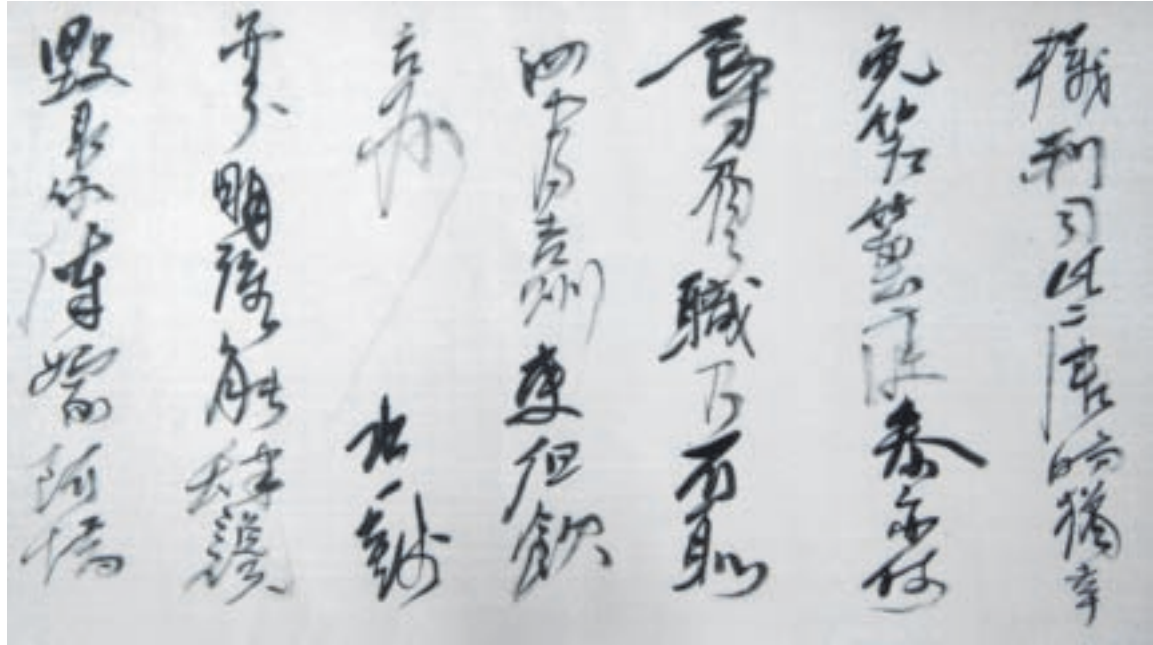
叔宝の作った「玉樹後庭花」は、彼の詩で最も有名なもので、曲調が哀愁をきわめるうえに、「玉樹の庭花、花開くも復た久しからず」という歌詞が、陳が滅ぶ前兆であったとして、亡國の音楽とされています。唐の詩人たちはよく健康（六朝時代の首都で現在の南京）を訪れて、かつての栄華を偲んでいました。晩唐の詩人杜牧もここに船泊りしていると、近くの酒場から陳の国を滅ぼした叔宝の作った「玉樹後庭花」が聞こえてきます。ほかならぬかつての都で、その因縁を知らないまま歌っている妓女たちの歌声は、それを知っている杜牧にとって深い感慨をおこさせずにはいられません。

秦の沈徳潜は、この杜牧詩を唐詩の傑作五首の一つに数えています。絶句という簡潔な詩型に史実を絡めながら甘美な哀愁がこめられていることを評価している結果です。

参考文献：唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）、NHK漢詩を味わう・中国紀行（芸術新聞社）

作品鑑賞





我老汝遠行	庭參亦何辱
知汝非得已	負職乃可恥
駕言當送汝	汝篤吉州吏
揮涕不能止	但飲吉州水
人誰樂離別	一錢亦分明
坐貧至于此	誰能肆讒毀
汝行犯胥濤	聚俸嫁阿惜
次第過彭蠡	擇士教元禮
波橫吞舟魚	我食可自營
林嘯獨脚鬼	勿用念甘旨
野飯何店炊	衣穿聽露肘
孤權何岸檣	履破從見指
判司比唐時	出門雖被嘲
猶幸免笞箠	歸舍却睡美
	嵩山書時己酉夏盛

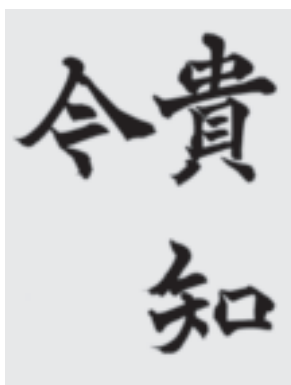
(陸放翁詩 送子龍赴吉州掾)

昭和四十四年、大島崑山先生四十四歳の卷子作品。前年に毎日書道展で準大賞を受賞、翌々年には倪元璐調の作品で日展において一回目の特選を受賞し、先生が倪元璐の書にのめり込んでいた頃（書道藝術誌一九八七年七月号倪元璐特集記事で述懐）の作品。倪元璐をここまで攻究して、卒意で書いた技量の高さに驚かされる。「象」

読み
時を識^しるは今を知るを貴^ぶ (時勢を認識するためには、現在を知ることこそ大切である・黄遵憲「感懐」)

知識
今時貴

佐藤象雲書



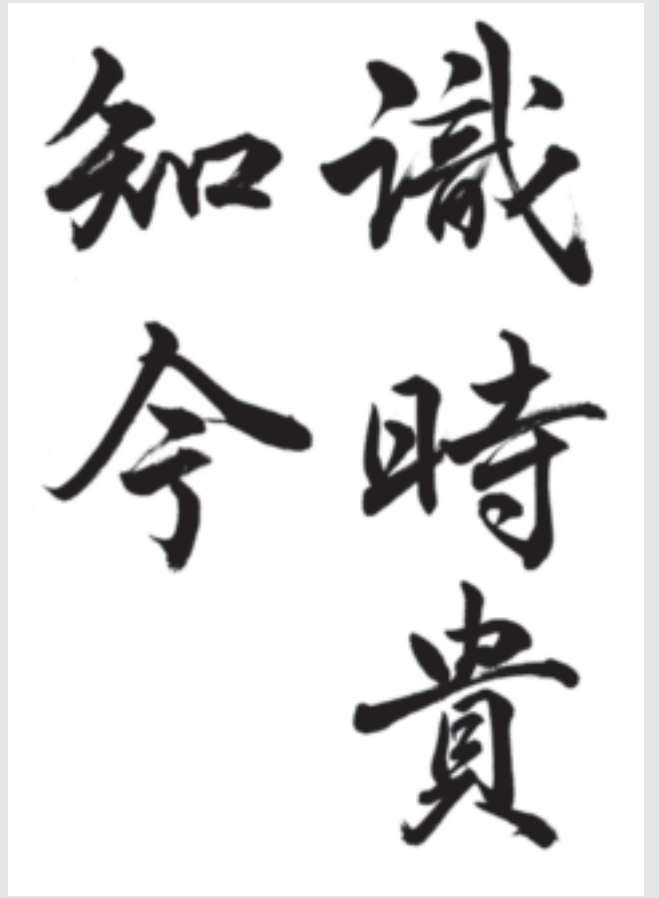
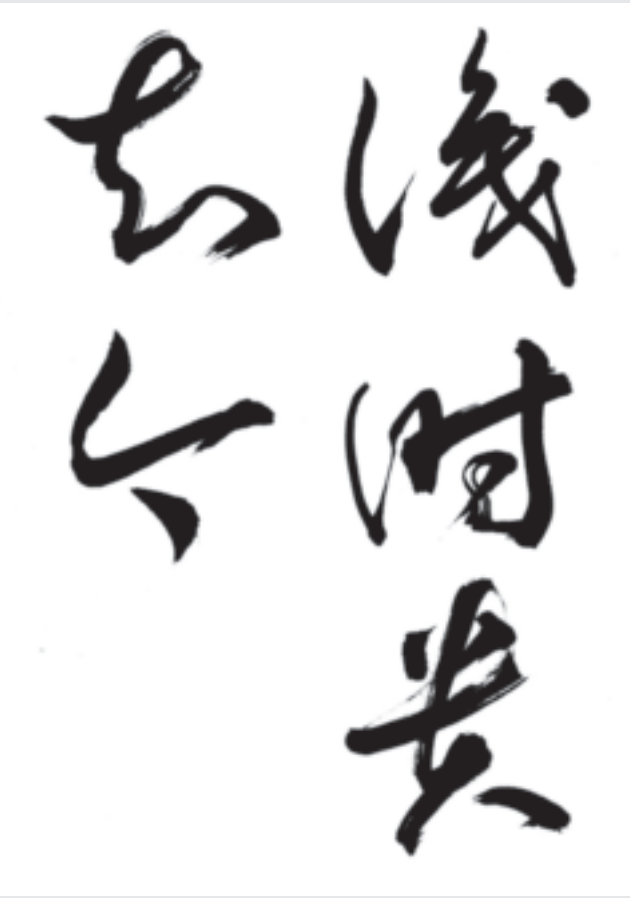
- 一般部規定課題出品について
- 規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- 初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- 規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。



次号課題

隸書



獨り釣る寒江の雪

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部	順 位	氏 名
<p>大根引る大根で道を教えけり 一茶</p>		
<p>小春日や石をかみも赤とほ 鬼城</p>		

和泉溪石先生書



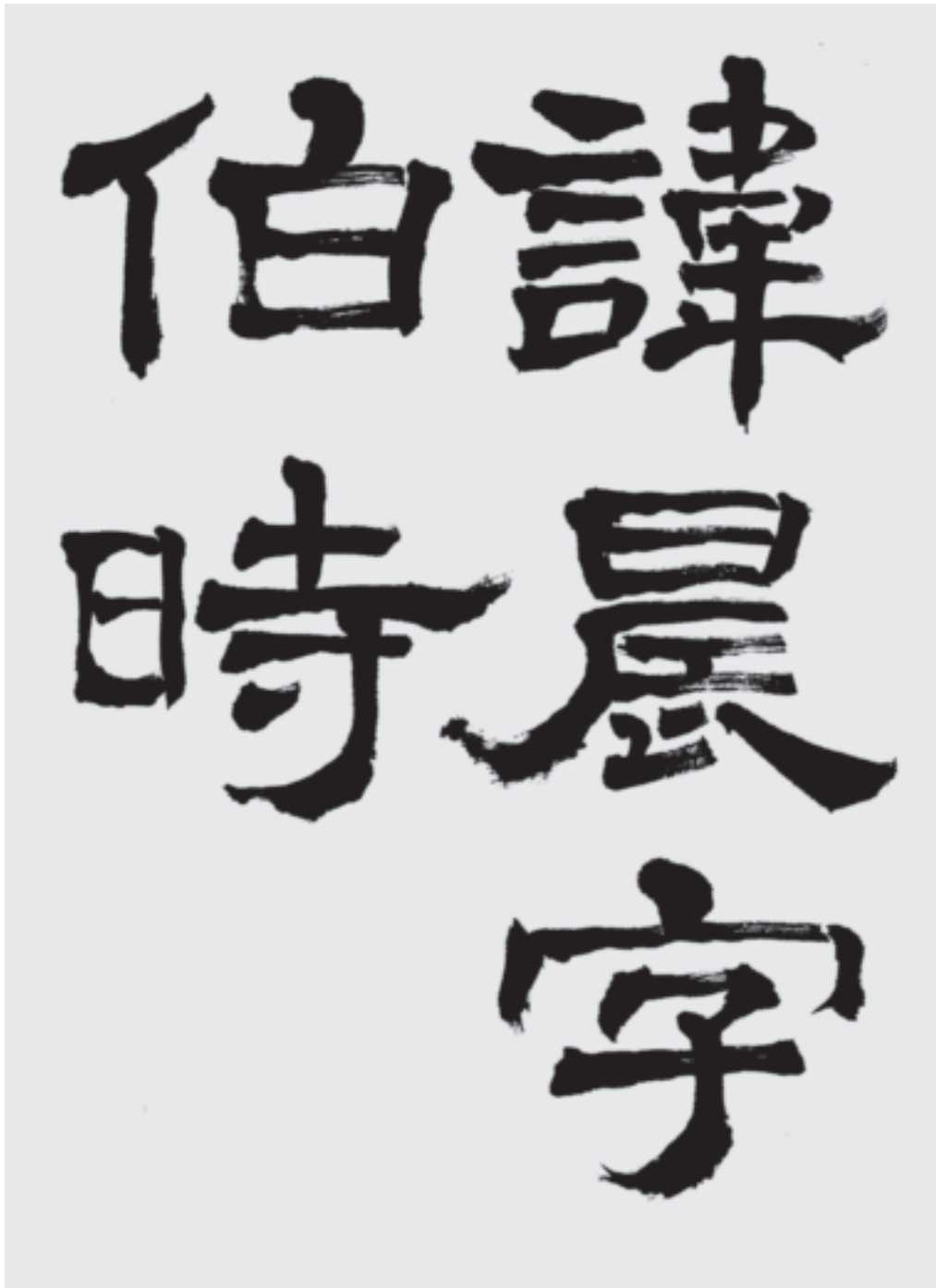
佐藤象雲書

音

モウシシユクシ
コウヒンケンシヨウ

略解

毛は毛嬙、施は西施という美女のこと。この二人は容姿がよく、眉をしわめる素振はあでやかで、微笑みは見る人を恍惚にさせる。



譚は農字は伯時

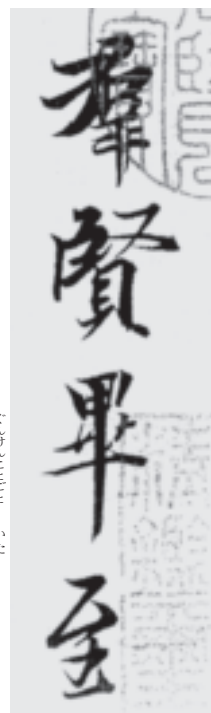
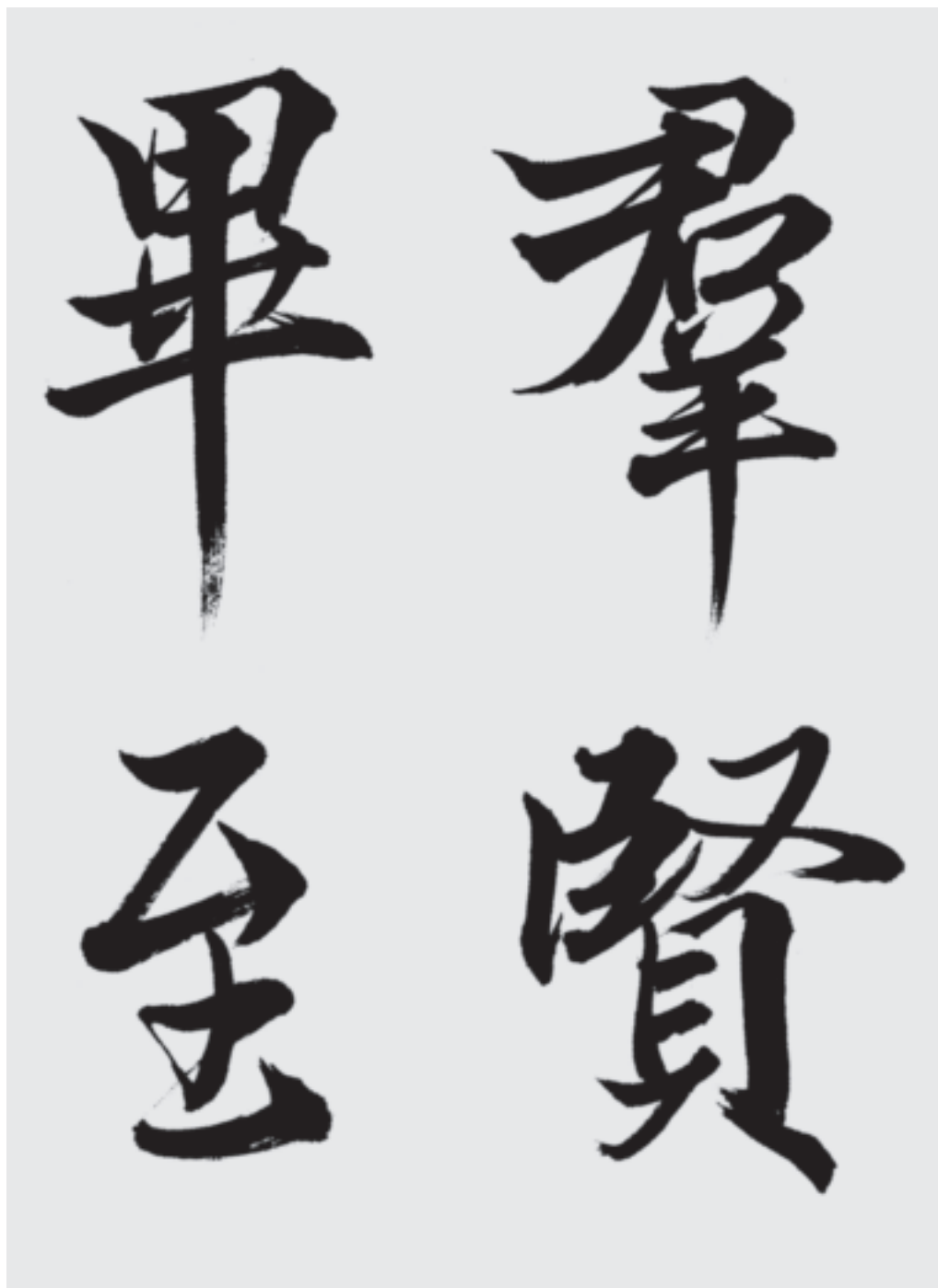
■ 史農後碑 (後漢・西暦一六九年) の臨書 (2)

象雲臨

『譚農字伯時』

文字は秦時代に小篆が公式書体として統一されましたが、もっと簡略化の進んだ文字が実用体として使われ始めます。いわゆる「秦隸」と呼ばれるもので、はじめは篆書の筆意を残しながら、次第に隸書特有の書体へと変化していきます。隸書という呼び名は、徒隸すなわち下賤な隸僕でも使える文字であったためとか、奴隸出身の程邈という者が作ったからとか、また小篆などの正式な書体に隸属する書体であるからなど様々な説があります。

さて史農碑は後漢二〇五年に曹操が禁碑令を發布する僅か三十五年ほど前に建てられたもので、約二百五十年間に百花繚乱のごとく作られた隸書碑のなかでも、完成された姿を見させている八分隸の代表的なものです。清時代の考証学者、王澐が「史農は謹嚴、漢隸の極側なり。」と言っているように厳正で漢隸の法則が網羅されていますので、まず隸書の基本として手に取るべき手本といえます。



群賢畢く至り
ぐんけんへいきたり

■王羲之・蘭亭序（東晋三五二年頃）の臨書（4）

象雲臨

『群賢畢至』

王羲之（三〇七〜三六五・諸説あり）は字を逸少といい、東晋の名門の出身で右軍將軍・会稽内史に至ったので「王右軍」と呼ばれます。王羲之は一般的には、この蘭亭序の書かれた経緯などもあり、優雅な南朝の貴族子弟のように思われています。しかし王羲之に関するエピソードが記されている「世説新語」や「晋書」などによると、東晋初頭の激動時代に軍人としての大志を抱き、骨気の強い武人肌の間人だったようです。そのうえ、書聖と冠されるほどの書の達人であった訳です。武人でありながら「貞観の治」と呼ばれる文化政策による善政を施し、また自ら書を得意とした唐の太宗に尊崇されるのも理解できます。

この蘭亭序が書かれた二年後に王羲之は職を辞して会稽で十年ほど隠退生活を送り、五十九才で没したと推定されています。蘭亭序の文中に「況や修短は化に随い、終に尽くるに期するをや。古人云う、死生もまた大なりと。」という文言があります。流觴曲水という雅宴において書かれた文章ですが、王羲之の武人としての人生の悲哀を感じさせます。